

次の文を読んで、あとの問いに答えよ。

一体、彫刻というものは一般には解りにくいものである。絵画や音楽ほどの表面の魔力に欠けている様に見られている。人の官能を刺激する要素が至極簡単であって、絵画が七彩の変化により、音楽が七音の紛糾によって神経に快い燃焼を起こさせるのに反して、彫刻はただ A があるばかりである。従って単調の感がある。これは仕方がないのである。ほかの事を考えながらも、絵画や音楽にはある刺激をうける。しかるに、彫刻を味わおうとするには真に心を傾けてかからねばならぬ。<sup>1</sup> 予め感応するつもりで催眠術の椅子に腰をかける人の心を持たねばならぬ。信じ切つてかからねばならぬ。でなければ、如何なる名作の前に立つてもすべて石塊いしころや金糞かなくその堆積にほかならぬものとなってしまう。如何なる名作にも驚かぬのは、B に驚かぬ猫の様なものである。あまり面白い事ではない。人間が活きている以上は寸毫すんごうでも多く人生の興味をあらゆる方面から味わい、出来るだけ豊富な有り余った内面生活を営みたいと思うのは、遠く埃及時代からの人間の欲望である。従つてこの猫の様にはなりたくない。世間には、彫刻の面白味を解せず、と行ってむしろ彫刻に対する侮蔑の意を漏らす人がよくあるも

のであるが、物を味わう力の足りないこれらの人の内面生活の涸寒こかんさを思うと情けなくなるものである。骨の硬くなった日本の中老年人にこの種の人が多いが、年の若い今日の人等をしてゆめゆめその跡を踏ましめたくないと思っっている。

彫刻というものは実に不思議なものである。人間の理解力を最も大胆に愚弄ぐろうするものである。絵画が平面に立体を出さしめ、無中に有を生ぜしめるのは、一の錯覚を利器とするにほかならぬ。音楽が刹那刹那の夢の連続で人を酔わしめるのは、人の情緒の波動に力負けをさせる。欺瞞ぎまんの技巧が余り巧緻に過ぎて不思議の感を起こさしめるに至らない。ひとり彫刻に至っては、「D」

という不思議な日本語で形容するよりほか形容のしかたに困るほどのものである。彫刻は何の欺瞞をも計らない。立体的のものを立体的に作っている。また錯覚をも絵画ほど有機的には利用しない。せめて眼球の光りを作るに却って反対にこれを剝くりぬくという様な初步な手品をする人がある位のものである。それ程無器用で人間の狡猾こうかつ性を離れたものでありながら、最も思い切りよく自然の色彩の感覚を無視している。忘れたのではないかと思わせるほど平気でこの不思議な仕事を敢えてしている。この有機的な自然の中から、かくも無神

経に、何の賠償もなしに、「線」の調律ばかりを  
抽き出して来る人間の能力はほかに一寸類がない。

そこで、彫刻は最も原始的のもので、やがて絶  
滅すべきものだ、などと地球の運転を心配する様  
な人が判断する事もある。しかるに、彫刻の面白  
味というものは、この原始的で、大道手品の様に  
無器用で、あからさまな、大胆な、少し智慧の足  
らない様な、凶々しい所に生命があるのである。

この点を認めて彫刻に向かわなければ彫刻の立つ  
瀬はなくなってしまう。否、見る人の立つ瀬がな  
くなってしまうのである。彫刻に向かつて絵画や  
音楽に求める様な表面の複雑な情調や官能の生理  
的跳躍の快さを求めるのは無理である。彫刻はも

E

つと灰汁が抜けているのである。原始的であると  
同時に、というよりはむしろ原始的であるから、  
最も進んだ現代人の心の奥の叫び声と共鳴する唯  
一の芸術である。現代人の心は中世期を踏台にし  
て遠くハイエログリフ文字の活用されていた時代  
と相呼応している。最も文明の進んだ、最も物の  
解った仏蘭西の芸術の中に、ロダンの彫刻あつて  
現代人を魔酔し去っているのは、彫刻のこの性質  
を最もよく説明しているのである。一見不自由の  
様に見えた彫刻の訥弁も、現代の核に突き入ると  
案外な雄弁に化するのである。冷淡に構えている

人にとっては彫刻はあくまで冷やかである。一旦自分を打ち込んだらこれ程心を蕩かすものはない。彫刻というものと朋友の交を持続する事の出来たのは昔の人の事だ。「あかの他人か、情人か。」彫刻の権威と魔力とはこう直截ちやくせつに叫ぶのである。

比較という冷やかな尺度や、錯覚というおめでたい眼鏡を手にして彫刻に向かう位なら、彫刻は見ぬ方がいい。石の人間や銅あかがねの人間は余り自然と遠ざかり過ぎていて、眼に見た自然を彫刻に見ようとするのは諦めねばならぬ。仏蘭西の文学家ユイスマンスが蠟人形を彫刻に輸入しようとした考えの甚だしく偏しているのはその後の彫刻界の事実が立派に証明している所である。彫刻家が裸体を好んで作るのも此所ここに根があるのである。色彩と触感との最も複雑した今日の人間の服装などを彫刻で再現しようなどとするのは、無駄な努力を費やす事になるからである。その上、人間の裸体の不思議なあからさまの感じが、その色彩を失って、彫刻の原始的な面白味とびたりと合うからである。自然と遠ざかり過ぎていて石の人間や銅あかがねの人間や木の人間を見ての興味は、自然の再現についての興味でなくして、自然の魂を幻に見る興味である。自然の氣息いきを直ちに耳に聞く興味である。自然の脈拍びやくぱくを遽然きょぜんとして指に触るる興味である。この時、

形の再現という意味は少しも伴っておらぬ。

「 G

えの様だが、彫刻は実にこの不思議な理屈を雑作もなく実現させるのである。よく幽霊に抱かれたという人がある。形も見えぬ、色も見えぬ、煙の様なものに来て体を包むと思うと、突然胸に烈しい鼓動を覚えるという話である。彫刻の人に与える感じは恰度ちやうどこの突然胸に烈しい鼓動を覚える感じである。その形は一種の記号的な原始の姿でいながら、人に加える刺激は不思議な衝心の威力をもっている。物の魂を抽ぬき取って来て、前後の考えなしに、何の装飾もなしに、人の眼前に放擲ほうてつした様なものである。だから、自然の形の再現でないという事をよく承知して置かねばならない。爪の形状を問い、腕の太さを尋ねるのは末の末の話である。

問一 傍線部 1・2 の読みをひらがなで書け。

問二 空欄 A に入る最も適当なものを、次のイ〜  
ニの中から選べ。

イ 空間を劃る輪廓の線の波動

ロ 時間を截断した刹那の物の表情

ハ 自然を欺く巧緻な形の技巧

ニ 立体を彫琢する単調な面の連続

問三 空欄 B には、慣用的な言い回しを踏まえた漢字二字の語が入る。楷書で正確に書け。



問四 傍線部C「ゆめ」の品詞は何か。次のイ〜ホの中から選べ。

イ 名詞

ロ 動詞

ハ 形容詞

ニ 副詞

ホ 助詞

問五 空欄 D には、問題文中にある四字の形容詞  
が入る。正確に書け。

問六 傍線部Eはどのようなことを意味しているか、最も適当なものを、次のイ〜二の中から選べ。

イ 彫刻は、泥臭く原始的な芸術とみられているが、実は絵画や音楽より、ずっと洗練された芸術であるということ。

ロ 彫刻は、絵画の複雑な情調や音楽の生理的躍動感が濾過された、静かで透明な上澄みのような芸術であるということ。

ハ 彫刻は、表面の情調や官能の快さに訴える絵画や音楽と違って、直接に人の核心に働きかける芸術であるということ。

ニ 彫刻が、人によって好悪の分かれる絵画や音楽と異なり、万人に理解されて誰の心にも訴える芸術であるということ。

問七 傍線部Fはなぜそのようにいえるのか、その理由として最も適当なものを、次のイ〜ニの中から選べ。

イ 昔の人にとって彫刻は信仰の対象であり、朋友に對するような親しみと敬意をもって接するのが常だったから。

ロ 昔の人のほうが彫刻に全身全霊で打ち込み、朋友と對話するように、その語りかける声に耳を傾けることができたから。

ハ 現代人は、孤独のなかで彫刻と厳しく向き合うので、どんな朋友もその間に介在することができないから。

ニ 現代人に対して彫刻は、通り一遍の関与を許さないなので、朋友に對するような穏やかさで対座することができないから。

問八 空欄 G に入る語句として最も適当なものを、  
次のイ〜ニの中から選べ。

イ 具体的な抽象美

ロ 再現的な空想美

ハ 主観的な客体美

ニ 人工的な自然美

問九 問題文における筆者の見解と合致するものを、  
次のイ〜ホの中から一つ選べ。

イ 彫刻は、絵画や音楽のような官能を刺激する魔力に欠け、表面的には単調であることをまぬがれないが、見ることでできない内部においては、きわめて緻密で複雑に構成されている。

ロ 彫刻にはフランスのロダンをはじめとして、古来名作として知られている作品も少なくないが、それらも結局は石塊や金糞の堆積にすぎないという冷静な視線も、一方では必要である。

ハ 彫刻から、現代人が激しい胸の鼓動を覚えるのは、文明の進んだ現代人であればあるほど、心の奥に潜んでいる叫び声が、彫刻のもっている原始的な性格と呼応し、共鳴するからである。

ニ 彫刻が人間の裸体像を好んで制作するのは、石や銅や木などの素材が色彩的で複雑な服装の再現に適さず、むしろ何の装飾もない人間の肉体をありのままに描くことを得意とするからである。

ホ 彫刻がめざすのは、自然の形を再現することではなくその魂を表現することであるから、表現をつきつめていけばいくほど、実際の形を離れて一種の記号的な原始の姿をとるようになる。

問十 問題文の筆者は、近代の彫刻家・詩人で、詩集には『道程』『智恵子抄』などの作品がある。その姓名を漢字で答えよ。解答は、楷書で正確に書け。